

終戦引揚の思い出

佐賀県鳥栖市 西依 静枝

昭和14年満州事変も激しくなり、主人が軍曹として満州（現在、中国東北地方）に渡ることになり単身就任しました。黒龍江省の神い屯432部隊に入隊致しました。1年半位しまして家族同行が許可になったのでとの知らせで、私達親子3人満州に渡りました。広野の中の部隊で親子4人、それは幸な生活でした。私は一応軍属と言う名目で当時の金で40円程頂いていました。1年程しまして今度は宿舎の方に住む事になり、部隊の奥さん達と毎日主保（軍の売店）に買物に行くのが楽しみで、家には満州人のボーイさんが来て雑役をしてくれ、最上の生活でした。ところが19年の秋頃だったか戦況が激しくなり、部隊が沖縄の方に行くことになり、家族は内地引揚となりました。

ところが主人と3人程が満州に残ることになり、大石橋へ行くことになり、私達家族は鞍山製銅所の社宅に住むことになりました。鞍山に着いたら驚きでした。町内皆日本人のお店でちょうど内地の大都会でした。当時地方の人達は物資が不足で皆困っていましたが、私達は軍のおかげで何不自由なく幸せでした。その頃私は妊娠しまして、翌年の20年8月14日が出産予定日でした。ところが戦争が激しくなり、主人達は絶対部隊から出ることは許されなく、関東軍からの命令が出たとのことでした。そうして軍の家族は疎開するようにとのことでしたが、私は出産を考えて思いとどまりました。ところが8月12日に思がけなく主人が帰って来て吉林に出張だと。話によれば、隊長の思いやりで私の出産を案じて下さって、出して下さった由。一泊して翌13日に吉林へ行きました。私は14日早朝から陣痛が始まり、10時頃男子を出産しました。明けて15日になり長男が学校から帰ると私の枕元に来て「お母さん日本は降参したそうよ」と言うのです。私は驚いて息子をたしなめていましたら、隣の奥さんが見えて坊やが言ったならと、「今組合中で天皇陛下のお言葉を聞きましたよ」と。「実は貴女にお知らせしたら産後だからと思ってましたが坊やが話しましたなら」と言って話して下さいました。それからは大変でした。じっと寝てはいられません、隣の奥さんにお世話お願いしていましたが、人事ではなく来てくれないのです。

仕方なく子供の食事等起きてしていました。翌16日に主人が吉林から帰り、満州北部からの引揚者で汽車は満員で修羅場だったとのことでした。一泊して一応部隊に帰ってみると言って、大石橋へ帰りましたが、その後は何の連絡もないし帰る事も出来ない状態のようで軍の方も散り、軍郵等もなくなり地方の局も駄目だとのこと。町も皆満州人に入替り、日本人は見当らないようでした。一度に異国の感で毎日が恐怖の生活に変わりました。お金は当時の800円貯金を降して持っていて、今から親子4人生活はどうなるものかと案ずると寝てもいられません。それから隣の奥さんに誘われまして露店にお店を出すことになり、朝早くからお寿司やおはぎを作って稼ぎました。ちょうど10月に入って、いよいよ寒くなるのにと案じてい

ましたら主人が帰って来ました。それからは主人が働いてくれました。話に依れば汽車にも日本人は思うように乗れなくて、南満州鉄道職員のナツパ服を着て貨車の中にもぐり込み、駅でも降りられなくて全力で飛降りて歩いて来たとのことでした。当時は、ソ連兵が侵入して土足で入り時計等持って行き、社宅の出入りもままならず、その中、日本の兵隊さんはソ連に連行されました。

それからは今度は満州人の世界になり、また恐ろしい事件ばかりでした。いよいよ引揚げが始まり、私達も8月に引揚げが決まりまして、支度に着物なんか全部満州人に売り、金に変え準備をしました。持分は金が1人に千円、食料を少しと雨具を用意せよとのことでした。でも金なんかありませんでした。それに乳呑子をどうして連れて帰るか、私は赤坊を抱いて泣きました。ところがかねて家によく出入りしていた満州人が、私が立派に育てますからと盛んに言うてくれましたけど、私としてはどうしても連れて帰りたいと、ことわりました。引揚の前夜は一睡もせず主人と2人で支度し、翌朝子供達はそれぞれリュックをかつぎ、主人は大きな荷物、私は後にリュック、前に袋をつるし子供を入れて旅立ちました。いよいよ汽車に乗りましたが、その汽車が無蓋貨車で牛馬のように詰められて、荷物はみんな前方に詰め身うごきも出来ませんでした。赤坊がお腹すかして泣いても、手持のカンパンをかんで食べさせるより仕方がないんです。米粉、お砂糖等ちゃんと揃えて持っていたんですけど、お湯もなく荷物は詰められて動けないし、ようやくコロ島に着いて1週間程泊まりましたが、これまた以前は軍の兵舎だったそうだが戦後は満州人に何もかもはがれて唯屋根があるばかりで、板の間の暗がりに皆ごろ寝でした。

ようやく舟に乗る事になり、またその舟が上陸用の舟とかで鉄板の上に筵を敷いてごろ寝でした。食料はコーリヤンおかゆと米で栄養失調で何人もの人が死に、無残にも水葬で、海中へ投入で本当に悲しい思いをしました。10日程してようやく舟が針う島に着き、上陸した時は皆日本の土をふんで感激しました。それより佐世保の集養所まで歩いて、その夜はお赤飯にお頭付で歓迎して頂きました。翌日は身体検査に注射と終えまして、それぞれの故郷へ向かいました。ちょうど21年8月16日お盆でした。私達も親子5人無事に帰り着くことができ、両親も大変喜んでくれました。主人の次の弟達がこれまた親子5人一足先に中国から引揚ていまして、一度に家族が13人になりました。下の弟2人はまだ帰っていませんでした。とにかく1日も早く仕事をと言うので、弟は福岡の建設会社に就職し、主人は長男だから家をつぐことになり、当時の町役場に就職致しました。しばらくは15人の食事が大変でした。食料はないし苦労いたしました。一応弟等は別居することになり出ましたので、少しはと思っておりましたら翌年の10月、1人の妹が病気になり結核とのことで、とうとう10月に亡くなりました。

ところが私が満州で生んだ、引揚げにも骨折って連れて来た子供に感染し、この子が翌年の3月に亡くなり私も主人もがっかりしました。可哀相な子でした。戦後生れたのでお菓子でも当時は食べれませんでしたものの、その後私はまた2人の子を出産しまして、男3人女1人、4人の子持になり両親を見、当時主人の給料は安くて生活が大変でした。私は若い時、和裁を

やっていたので、ちょうど戦後落付いた頃から和服が大流行でしたので、和裁の内職を始めました。夜昼お弟子さんも沢山見えて必死に働きました。4人の子供も学校に出し、両親も見送り、40年程頑張り子供達もようやく自立しまして、やっとの思いでいましたら主人も一生働きづめで62年に亡くなり、私は一人になりました。

本当に波瀾万丈の一生をよくぞここまで生き抜いて来たものだと思います。現在は独り暮らしで、福祉の方々のお世話になり毎日毎日感謝の日暮しをしています。